

その純粹な感情を、管理培養し適切な制御の下に置く。僕が目指したのはそういうことだ。ともすれば僕らに与えられた思考と情動が、僕らを苦しめるから。いつのことだっただろう。理想を追い求め、理想の行きつく先を見ようとしたり。しかし理性に裏打ちされた論理と、僕に動機を与える情動が相容れなかった。渴望する僕の熱情に適切な船頭を与えるものを、探している。

僕は名を喜多島という。

「一体誰の理想を体現しようというのか。」フラスコもビーカーも脇に放りだして、僕は両手で顔を覆った。いつもこんなだ。残念なことにもいつもこんなだ。

口惜しい、口惜しい。僕はいつものように、幸田主任に実験の結果を報告し助言を受ける為のレポートを作成し始める。―感情の制御と体現について。云々。

もう半年も成果がない。僕のデスクの片隅には半年前に試作した精神固定機がうっちゃってあった。幸田主任には酷評されたが僕は真面目だ。僕は白衣の袖を神経質にいじくる。もうボロボロだ。もう一着購入しよう。

「喜多島。今日、一杯どうだ。早く上がろうぜ。」

「三ツ矢。残念だがレポートが未成だ。また今度にしよう。」

「幸田主任ならもう帰った。報告書なんて明日でいい。行こう。」

仕方ない。今日は付き合おう。実際、少しうんざりしていた。白衣を椅子に脱ぎ捨て、灰色のセーターに頭を通す。

「そういえば、お前のデスクの上にある蓄音機には何の意味があるんだ。電極がくっついてたぞ、あれ。」

「ああ、あれは僕が発案した精神固定機だ。すなわち喜怒哀楽からなる人間の精神の動きを固定する。」

「新車の冗談だな。どういう仕組みだ。」

「僕にも仕組みは分からないが、音楽は人間の精神を体現する。そういうことさ。」

「くだらない冗談だな。」

「あつはつはつは、ははは。」僕は思いっきり笑えた。彼も思いっきり笑っていた。

しかしいつしか、目を追うごとにそれは冗談ではなくなっていった。そもそも、最初から冗談であつただろうか。

「喜多島君。やめろ。やめたまえ。」僕は主任のこめかみに電極を繋ぐ。彼の手足は縛り付けある。僕は主任に語りかけた。

「幸田主任。僕の頭脳の明晰さは、かほども失われてはいません。ただ、その情動の振れ幅が大きすぎるのです。だからこそ、この精神固定機を発案した。僕の発言が理性と論理から逸脱しているでしょうか。仮にそうだとするなら、理性を喪失しているのはあなたの方だ。証明しましょう。」

「それは唯の蓄音機ではないのか。わたしは君の知性を高く評価してきた。それなのに。それは唯の蓄音機ではないのか。設計を見直してみよう。」

「いえ、証明します。僕の苦悶が僕だけのものであることを、誰も否定しないのだから。」入電する。瞬間、主任は僕を見る。だが、それでお終いだった。

事切れた老人の姿は僕を激昂させた。何故か、何物が私の論理を否定するのか。何の分際でそんなことができる。お前の意思を肯定できるものがあるのか。断じて、許せやしない。憤激した僕は自ら精神固定機の作用力場に入った。

途端に、優しい調べが聞こえてくる。

―かつての記憶が明晰さを増して来る。ザツカ、ザツカ。延々と軍靴の群れが行進して行く。誰にも止められないその歩みを、私はただ眺めていた。誰も、誰も、歩みを止めない。どこまで行こうというのか。どこまで行けると考えるのか。誰も、行きつく先を知らないだろう。馬鹿野郎。馬鹿野郎。

連想が止まない。追憶に囚われる私の耳に、ゆっくりとしたメロデーが流れ込み、また溢れていく。荘厳で、美しく、優しい調べだ。人間の精神斯くあれど。理想を語るその調べに、嫌悪と安らぎを覚える。その先の破滅を、僕は未だに知り得ない。涙が頬を伝う。僕は僕の最後の思考を反芻する。

かつての僕は耳を塞ぎ、目を閉じて、眠ったように生きることを願った。でもね、卑小の方からどんどん僕に寄ってきて、放してくれないんだ。そこにはどうしても僕の及ばない力が働いていて、僕を苦しめる。故に僕は卑小の存在を否定しようとした。

そうまでして、一体何を為したかったのか。私は理想を追う調べを憎んだ。人を狂わせる理想の輝きを憎んだ。破滅の先を見詰めて眩んだ目が嫌いだ。我々は未だに、感情を御することに精一杯なのに。憎しみだろうが苦しみだろうが消し去ることができない。そこに示された理想は理想でしかない。叶わぬ夢を、見つめ続けるか。

「まあ、最後に笑えばいいのさ。」やっと、誰かがそう言った。

「では、僕は遂にこの孤独から解放されるのだね。」

僕はそれきり、見ることも聞くことも止めてしまった。積年の記憶が、形を喪う。